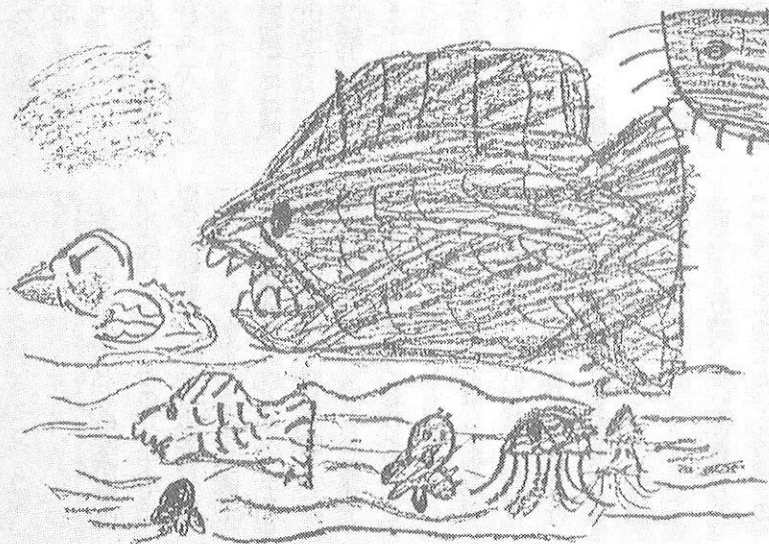


光の子

発行／社会福祉法人 光の子どもの家
編集／光の子 編集委員会
〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277
TEL／0480-72-3883
振替／東京3-128022
印刷／(株)ドモン企画

残暑お見舞い
申し上げます

社会福祉法人 光の子どもの家



ばらぐみ みなもと まさし

誘惑と祈り

(ルカ・二三・39-46)

理事長 福島 勲

「誘惑に陥らないように祈りなさい」弟子たちに対するイエスの最期の教えであり要求である。

誘惑は悪が最初から警戒色のよ

うに明白であるのではない。
とても良さそうな色調で迫って
くる。だからこれに備えるに、熱
意と勇気と決断が必要である。

ゲッセマネの園でイエスは血の
汗を流して熱帯をささげられる。

石を投げてとどくほどのところ
にいる弟子たちに祈れといわれる

しかし、イエスはご自分のため
に、またご自分と同じ題目で祈れ

とも仰せられてはいない。
弟子たちが誘惑に陥らないよう

に祈れと再三すめられる。
この期に至って弟子たちの誘惑

は何であつたのか。言うまでも
なくこの時期だけのものではなく

人間の基本的な誘惑であらう。
第一にはイエスに対して不信に

陥らないことである。イエスの十
字架の死が、罪のゆるしと救いの

業であるが、この死が指導者の無
能と敗北の死と解してイエスから
遠ざかることのないよう祈らね
ばならない。

またこのような危機に遭遇して
これから脱するに神の助けの實力
行使として、天軍の援けを期待し
権力や軍勢力や物理的行動を当然
として解決を望むことである。

しばしばわれわれは神の業にた
ずさわりの窮地に追いやられたとき
悩まをかすめる思いである。

なぜにわれわれだけが苦しまね
ばならないのか。このような思い

の底にはいつのまにか、自分たち
が改革者であつたり、主義に殉ず

る英雄であつたり、さては小さい
救世主であつたりするかのとき

驕り高ぶりが巣くっているのだ
る。

かうして名誉や利害に身を委ね、
本来の使命からその方向がそれ、
責任回避がはじまるのである。

弟子たちは疲労の極み、眠って

親身

養護施設光のこどもの家が難産

パスカルは誘惑される人たちは祈らないから誘惑される(パンセ)という。
 泉鏡花の小説「高野聖」には岐阜から信濃へぬける山中で、一人の坊さんが妖艶な女の魅力と戦い一心不乱にお経を唱えてこれに内勝つ場面がある。

キリスト教唱名などないわれわれだが、「主よ助けたまえ」を繰り返してもよい、とにかく懸命に祈らない限り、強烈な誘惑の攻撃に備うべき術はない。

眠っていた弟子たちは一旦は誘惑に負けた。しかし、御霊の助けによって主の僕として立直った。祈らない敗れ、このところ誘惑に対する弱さをしみじみと感じさせられる。
 名を捨てて実生きる福祉事業の場であって、ここでもまた熾烈な戦いを強いられる誘惑を感じ、深く反省を促される。

の末に開設され、この六月末で三周年を経過し、四年目の養育実践に入っております。この間、地元の方々を始め沢山の人が、子どもたちの健やかな成長を願うという一点で暖かいご支援をお寄せ下さり、今日に至っておりますことを衷心より御礼申し上げます。

石の上にも三年と申しますが、地元大根町の幼い兄弟をお預けいたいただくようにもなり、地域社会の子どもの福祉に寄与することができるようになりつつある実感を深めております。

また、この間、若い職員たちの「一緒に暮らす」という目標への夜を日に継ぐとくみ、いわゆる普通の家庭のような生活形態を可能にし、子どもたちの落ち着いた暮らしと著しい成長を見せ、そのことが養育者としても目覚ましい成長を獲得させており感謝に堪えません。

施設長 今関 公雄

四年目という節目を迎え、とりくみの根拠を成す要件について少し考えておきたいと思っています。

まず、養護施設に入所してくる子どもたちは、家族、特に両親の葛藤の中で暮らし、成長してきていることで、大きな影響を受けています。三ツ児の魂百まで、といわれる、充分な愛情、信頼などの基本的な人間関係を体得すべき幼少期を、不安定な関係の経験しか出来なかった場合が大半です。

また、将来、社会に適応していく能力である社会性を体得していくために不可欠な、親子を中心とした家庭教育も、多くの場合著しい不足や偏りが見受けられます。

そのような子どもたちと保母などの職員が共同で暮らしを始めていきます。ここで初めて出会う赤の他人同志であり、出産も育児も経験のない、若い独身の職員が、向こう見ずとも言える困難を極める養育に当たるのです。ここには

大きな矛盾と重荷の存在していることに気づかれます。

職員たちは保母、生活指導員などの専門的な学習をしてきた有資格者ではありません。しかし、養育は資格が為すものではありません。保母養成の教師をしていた頃、資格で仕事はできない。子どもとの関わりは過程で保母に育っていく、と講義をしてきました。関わる子どもに、こう育って欲しいとの親身の想いが特に大切であることを力説してきました。

養育現場の真っ只中に身を置いて、この「親身」について再確認しています。子どもにとって、何よりも必要なことは、自分について本気で心を遣ってくれる養育者の存在であろう。しかも、この関わりが、子どもと共に養育者も成長させるのである。

這えば立て、立てば歩めの親心。可愛くば三つ叱って、四つ誉め、五つ教えて良き人となせ。親馬鹿などと言われる、我が子への過信とも言える信頼等々の、古来よりの親子や子育てに関わる言葉に愛着を感じる今日この頃である。

★児童福祉週間記念事業 第三回講演会
施設養護を考える

堀川愛生園園長 飯田 進

○養護施設への道

私は、旧制中学時代を通し軍国主義教育を徹底的に受け、父が海軍軍人であった関係で軍人少年として育っていました。その途中の昭和二十年、敗戦を迎えました。それまで軍国主義教育を掲げて叩き込んできた学校や教師が、手の平を返すように民主主義を教え始めたわけでは、私はすっかり教師や学校教育に信頼を失ってしまい、自分の将来にも希望を失ってしまいました。

多感な少年時代の曲折が、私を硬派の不良というか、ワルの旗頭にしていったのです。そんななかで、ある先輩をそのかしてワルを働こうとしたとき、その先輩の盲目の母親が、私のいることに気が付かず、必死で先輩を心配して語りかけ、さとしていた姿に立ち合いい、自分自身の行く末を本気で考え始めることになったのです。当時、住んでいた町内は、引き

揚げ者や外からの寄留者が多くおり、戦後の荒れた風潮と相まって子どもの気持ちも荒んでイタズラやワルさで警察のお世話になったりもしていました。何とか子どもらしい遊びや活動ができるようにと、ガキ大将の私が子ども会をつくって活動を始め、町内の名誉挽回をするようになりました。

夏のキャンプを計画した時、山口県の仙島で、初めて養護施設に出会うことになりました。そこは、戦災孤児や引き揚げ孤児などの養育をしておりました。その施設でキャンプをさせてもらい、クリスマスには私どもの町内会の家に施設の子どもが分宿したりの交流が何年間続きました。施設長を子どもたちが親以上に慕っている姿に出会い、素晴らしい生き方があるものだと知らされました。

このような契機を経て、上京して社会福祉を本格的に学ぶ事になります。旧制中学三年中退から、

大学入学検定試験を受けて経済学政治学を学んで社会福祉学を学部から大学院の第一期生へと学び、卒業後、広島県の新設養護施設へ最初の就職しました。理事会・施設長がゴタゴタし、施設へは六月に入ってからいきました。三年間頑張り、軌道に乗りかけた時、次の秋に堀川愛生園の園長が辞めるため、力になってくれと頼まれ、約五ヶ月間、広島と福島を掛け持ちの上、昭和四十年四月から現職を勤めることになりました。

○子どものねがい

堀川愛生園の入所児童資料から特徴的なことを見ておきたい。子どもが三名いるうち、乳幼児期の父母との離別体験者が二三名にものぼります。つまり実父母の離別理由とその時の児童年令に於いて、三才未満が十二名、三才〜五才が十一名です。したがって、乳幼児期に実父母と離別した子どもたちに、どのように対応すべきかは、大きな課題であります。

三才の子どもが入所してきまして、母が精神病院に入院、離婚し

た父は行方不明。祖母にぞだてられるが、三才になるまで、7〜8ヶ所も転々と預けられていた。入所に関しては綿密な検討を加えるところから一週間ほどかけた。結局、合意して結論を出せず、この入所は受け入れることが難しいという方向に傾いていった。その子どもの将来に責任を負えないし、入所を拒否もできないという悩ましい事実なんです。それでは、子ども夫婦のところで引き取ろうと言ったことになりました。

もう、その子は中学三年になって、うちにいます。その子が家にきて何週間経った後、家内が買い物に行くんで、自動車にその子を乗せて行こうと声をかけたところ、突然、火がついたように泣き始めたんです。そして、泣きじゃくりながら「僕をもう何処にもやらないでくれ！」ってこう言いながらまた泣き続けるんです。まわりには職員たちは圧倒されるしガクッとしてしまいました。

○養育の一貫性と継続性
前述の子どものように、タライ

子どもを取り巻く大人たちが、その子どもの諸権利をよりよく行使できるようにしなければなりません。子どもは的確な自己主張ができず、様々な行動や態度で表すうとするのです。それを大人が的確に受け止めることが中々できません。子どもの心の訴えを、どう

前述の子どもの例などもあり、堀川愛生園では一部をグループ・ホーム（家庭養護寮）へ移行して家庭の養護を計っています。

施設の子どもが持っている共通の課題として、劣等感と自信のないことがあります。学力停滞や学業不振がほとんどの子どもに見られ、地域社会の施設に対するイメージの問題でもあります。そのことなどから、施設臭くない施設への脱皮の必要に迫られました。これの帰結として、グループ・ホームへの移行があるのです。欧米で

堀川愛生園では、小舎でできるだけ手をかける養育に努めています。就すが、それでも集団生活です。就職後自立性に乏しいように思えます。「淋しい」と訴えてきます。

集團のなかでワーワー暮らしている、いきなり社員寮で独りになると、堪らない不安をかきたてる。友人を求めていくが、望ましくない関係になっていくことが多い。このような失敗から、高校進学に重点をおき、ここ数年一〇〇％の進学を果たしています。人間関係生活適応能力、言葉遣い、生活習慣などの改善・習熟のための期間として、高校三年間の重要さを改

高校進学率が全国で九十数%の時代に、養護施設の子どものそれは三七%という厳しい現実です。

子どもたちが家庭環境のハンディキャップに加え、人生の出発時のハンディを克服し、更に、思春期の危機を乗り越えるためなどのために高校進学は重要です。中卒でこの社会に出すにはとても充分な条件とは言えません。

人様の子どもを育てる施設養育において、施設長や職員の資質の問題は重大です。十年一仕事と考えて、施設長は十年任期で一区切りして、適宜妥当な評価を受けるのも一案でしょう。職員については、クレペリン、エゴグラム、YGテストや精神科医の助言をえたりしながら、人格・性格の傾向を把握し、職員全員の面接を実施し

山のぼりは、とてもおもしろかった。山のみちを八時間もあまぎました。とちゅうでみちにまよったりしたけど、がんばりました。

もう、三かいも山にのぼりました。

こんどは、雲のある山にのぼります。

七月二日の日記から

人間は鍛えられるほど強くなり、これでいいのか?と不安や疑問を持っている間は成長出来ると思いません。自己豪華が各々大切です。

職員は、子どもから見るとモデリングの対象、お手本です。保母の言葉遣いや態度、字や文章の書き方まで似てきます。担当者のコピーのような同一化の現象です。それだけに、欠点や癖も含めて学習されていくことについて、神経質なほど考える必要があります。

また、子どもの気持ちを読み取れるような神経質さが、吞気さや余裕とともに必要なのです。

そして、何よりも大切なことは人間関係、特に信頼関係の形成です。子どもと職員の間に信頼をつくるのが、小舎型、大舎型を問わない施設養護の基礎なのです。

○ 欧米の養護施設の動向

各国の共通理念として、第一に家庭重視があり、養子・里親の活用が図られています。同時に施設が地域の福祉拠点として、予防的な福祉活動をして、家庭の崩壊を防ぐなどの働きをしています。

第二に、地域でのケアが図られ
ノーマリゼーションや脱施設化が
志向されています。誰もが出来る
だけ地域で生活出来るようにし、
施設は大規模から小規模へ移行し
ていくなどの潮流です。

第三に、施設の少人数、少グル
ープ化によって、少人数の処遇を
めざした小舎制の養育形態やグル
第四に、施設の専門性を強調す
る考えがあり、治療的生活共同体
としての施設を評価します。つま
り、職員職としての力量や治療能
力によって、情緒障害や教養性を
もつ子どもを委ねらるのです。

この点、日本の養護施設が、大
舎型の形態による大量収容、合理
化、経費節減、管理支配を優先さ
せてきた現実はあるべきです。

様々な生い立ちのなかで負い目
を担わされている子どもが、施設
の生活で、健やかに伸びていく条
件を真剣に追求するため、各国に
学んでいかなければなりません。

○ 心を差し出す

保母などの職員が、子どもが自
分と一緒に生活していることを本

を省み、確認することを忘れないで欲しいと思います。また、自分がその子どもと一緒にいることを喜んでいるかどうか、大きなポイントだと思います。デローズ神父の「あなたはこの子どもを幸せにできるか、この子どもはあなたを幸せにできるか」という問いかけを判断基準とする点検です。

「子どもを育てる仕事は、神様から委ねられた崇高な業です。親や大人は、その崇高な業を為し遂げる責任があります。助けを求めている人に、物やお金を差し出すのではなくあなたの心を差し出すべきです」マザー・テレサの言葉を思います。

私たちは、子どもに心を差し出しているかと自問しつつ、本当に子どもたちに必要な存在者になる努力を惜しみなく続けたいと心から願う者です。

本稿は、当日の講演の収録を、紙面の都合で割愛、編集したものです。飯田先生には心から感謝とお詫びを致します。編集委員会

現場から

輝きのかたち その2

池田 祐子

一九八七年十一月、五才の湊子ちゃんがやってきました。高雄ちゃんや一志ちゃんのお姉さんです。湊子ちゃんは、家の職員や光の子どもの家の大人たちに「子どもらしくない子どもだね」と言われるほど新しい集団や場面、人間関係などに抵抗なく適応し、そのくせ情緒的な言葉や状況に反応できない子でした。一週間もたないのに、もう何年もいるみたいに馴染んでいるのです。五年間の施設生活のメカニズムが細胞に組み込まれているかのようでした。生まれてすぐに産院から乳児院へ入所してのまる五年は、特定の大人との間で安定、充足、信頼等の大切な基本的人間関係を経験することが出来なかったか、極端に欠けていた事が思われます。

五才になって間もなく里子に出され、里母と五年遅れのそれができそうになった途端、里母との不調が先に出てしまい、引き裂かれ

何が何だか分からないうちに、光の子どもの家への入所となったのです。湊子ちゃんの幼い心はどんなだったでしょうか！どんなに痛んでいたとしても湊子ちゃんはそのことを表現したり、訴えたりはしませんでした。いや、彼女には痛みも喜びも訴えたり、伝えたりして共感すべき対象となる人々が生まれて以来、居なかったのです。丁度、洞窟のなかの蛙などには眼が無いが、あっても役に立たないように退化してしまいうように、湊子ちゃんの情緒を進化させ発達させるべき条件が無かったのだらうと思われるのです。

ともたためらっていました。子どもらしくないのは湊子ちゃんのせいではないのに……。

この子を愛することが私の仕事Vなのです。人を愛することが仕事——私には出来ませんでした。この仕事に関わり、携わる資格があるのだろうか。悩ましい時間が流れていきました。

笑顔の子どもたち——深く重い痛み苦しみを負いながら！

愛することが仕事の私。仕事なんかではなく理不尽な負い目を担い続けている子どもたちがいる。しかも笑顔で！

仕事の私には努力しなければならぬ義務がある。さあ、手をつないで、抱っこして。決意をかためてとりくみました。

隣合う職員たち、子どもたちに沢山、たくさん助けられました。担当者として一対一のかかわりを深め、軸になる基本的な人間関係を創っていく——一ヶ月過ぎて当然過ぎるような、これを基本にした湊子ちゃんの個別養育計画を作成しました。

ここは、夕焼けがとても美しい。園庭には、季節の草花が咲き、真ん中には善意の人々の寄せられた木が深い緑をたたえてそびえています。家の廻りの田圃も青々と広がっています。この素晴らしい自然の環境に感動する心はまだ育ちきれていないようです。

気のいい仲間や優しさに満ちた人々と共にいることの豊かさや楽しさ、嬉しさ、心強さ、あるいは誰かがいなかったり、病気になるたりすることが、淋しかったり、寂しかったりする心もまた表現されてはいません。

現場から

光の光らしく 12

岩崎 まり子

春とも言えない、夏とも言えない、この移ろいやすい季節。刻一刻と変身していく紫陽花の花が、よく似合います。

そして、燦ちゃんにも、どこか似ている季節です。いい表情でいいな、と思うと、すぐ意地悪をして今にも角が出そうな表情になりお姉さんになったな、と思ってしまうと、すぐ赤ちゃんと早がわり。それでも、ニコニコいい顔でいられることが多くなってきた燦ちゃんです。燦ちゃんから「燦お姉ちゃん」と慕われ、午後はほとんど二人で一緒に仲良しです。

「午後は」というのは、燦ちゃんもこの四月から幼稚園に通っているからなのです。

過日の幼稚園の先生方との懇談会では、「みんなといっしょにやがでできない」という話や、燦ちゃんのいくつかの幼稚園不適応の実態が報告されました。

先生に、多大なご迷惑をかけて

いることは事実だとしても、燦ちゃんは、毎日幼稚園に行くのを楽しみにしている、そんな燦ちゃんを見るにつけ、四月の幼稚園入園は正解だったと思うのです。

というのも、燦ちゃんの「四月入園」は、職員会議などで何回も検討協議されたことだからです。何でも強い興味を持ち、委細かまわず行動にでて、稀には生命身体危険さをおかしてしまふ燦ちゃん。人とかかわりも、マイナスの行為で、そのきっかけにしていく燦ちゃん。言動の加減やバランス感覚が普通の範囲にとどまらず、事物や自分を含めた人に対して、粗雑な表現が多い燦ちゃん。

でも、心根はとても優しく、素直で、明るく、臆病な燦ちゃんなのです。

「春になったら、高ちゃんと撮ちゃんと幼稚園に行くんだよね」と子猫のような顔をくしくしやにして、入園の日を待ち続けてい

る燦ちゃんをがっかりさせるわけにはいきません。是非、みんなと一緒に四月入園を、と主張する担当者を中心とする保母たちと、四月にこだわらないで、三歳保育の三学期を利用するなど、ふさわしい集団への導入が望ましいと提案する指導員たち。燦ちゃんの現状把握と課題克服の手だてや考え方が統合がとて困難でした。

話合ふなかで、何が最も正しい対応なのか、誰が燦ちゃんを正確に捉えているのか——分からなくなってきたもありました。

結局、担当者の意志が尊重され、四月入園は実現しました。その間、文字の積木やピアノカで遊んだり、粗雑な言動の克服などの為、特に、家の職員や日中保育の鎌田さんなど、あらゆる場面の協力を集めて、備えました。

「上手に食事ができたね」「お皿、そうっと重ねられたね」と誉められて喜んだり、「それじゃ、幼稚園へは行けないね」と叱られたり……。どうしてこんなにしてまで……と思った事でしょう。そして四ヶ月、登園の時に着て

いったのと違う園服を着せていたなど多くありますが、燦ちゃんは毎日元気に幼稚園に出かけます。過ぐる父の日には、一生懸命に連絡して、久しぶりのお父さんと楽しいひと日を過ごしました。

すべての意味をこめて「今Vを思う時、多くの人々が、伸べて下さった手や心や願いに感謝しなければなりません。また、この仕事

が、決して間違っていない、子どもたちの決定的な岐路に立ち合つことであることを、改めて思い知らされています。自分の思いやかわりが含む誤りに、気付くことさえできないようなことが多くあるのだらうと思い、恐ろしくなります。しかし、それぞれの立ち合う場面のなかで、心から湧いてくる「可愛い！」という思いが、大きな間違いを避けさせてくれるのだらうと思います。心から「かわいい！」と思う——無条件に愛すること、すべてはそこから始まります。

愛することには、努力が必要でその努力には、喜びと同じ位の辛さが伴うことを知った季節です。

日誌抄

四月一六日
七月二〇日

四月十八日 第一五四回職員会議

前月からとりくんでいた児童福祉週間記念行事のシンボル、イメージ、内容、規模など委員会の報告を検討。出来るだけ自由な「子どもまつり」として行うことを決定する。

三〇日 国際婦人福祉協会よりデラックスなワゴン車ニッサン・キャラバンが届く。感謝。

五月一日 埼玉県共同募金会よりワゴン車三菱デリカ寄贈。公的交通機関の皆無な当地での輸送面の整備は当面完了。感謝。

四日 第二回子どもまつり実施。石膏で作ったシンボルのヘラクレスが曇り空を睨んで立つ。おもちゃについて、バーベキュー。歌って踊って演じて・・・お友

だちも四〇名余り集まりました五日 開設以来熱烈な支援の大塚東一氏よりいちご狩りのお招き甘い香りのハウスの中で「オイシイ!」の連発。ありがとう!九日 江森理容店のご主人散髪の

ご奉仕。毎月、ありがとう。

・第一回夏期行事委員会夏休みの迎え方と行事の検討開始。

一三日 児童福祉週間記念事業の第三回講演会を堀川愛生園園長の飯田進先生と桂田先生をお迎えし、同仁学院の院長先生と職員方もご参加。明快に熱っぽくそして痛烈な刺激を。感謝。

二〇日 堀川愛生園の職員十一名お出でになり交歓の時を。大先輩のお引き立てに感謝と末長い交流を願ひ、余り遅れずについて行けるよう励むことを決意。

二三日 この日から原道小学校の家庭訪問開始。日ごろの子どもたちの様子を伺い私たちの姿勢と子どもへのご理解を願う。

二四日 国際婦人福祉協会よりワゴン車の贈呈式を首相官邸で。二八日 第十五回理事会(事業報告決算)

六月六日 高山喜志、回廊塔から落下、左足骨折(全治二ヶ月)に衝撃を受ける。

八日 幼稚園教師との懇談会を当所で、夕暮まで熱心に。

十三日 塩野進夫、熱性発作(ひ

きつけ)で入院。初体験の担当

の坂巻「コワカッタ」と一言。

十七日 埼玉県指導監査。子ども

への細かい指導を評価される。

管理面の改善を要望される。

十九日 父の日。幼稚園保育参観

お父さんが六名駆けつけ参加。

二二日 F・F君五年生入所。

二四日 D兄弟三歳、五歳入所。

二五日 栗橋町在住の根本さん、

「光の子」発送等のボランティア

アのお申し越し。感謝。

七月一日 熊谷児童相談所の担当

福祉司四名来訪して情報交換等

八日 鎮守様の夏祭り。神輿をか

ついでワッショイ。半数がウチ

の子どもたちになって。

・夏休みに向けて、子どもたちの

親たちの訪問を始める。働いて

いる時間を外して、気遣いを避

けて予告なしで・・・。

一八日 第一六七回職員会議。夏

休みの生活づくりと行事計画の

最終検討と確認。子どもたちの

生活がまるごと帰ってくる。前

のめりになって迎えよう。

・この間も多くの入々から沢山の

ご支援が・・・感謝。(くら)

反射光

去年の春植えた萩の苗が園庭の窓一杯茂り、小さな花

が透明な風を動かしています☆不順な夏でしたが皆様いかがでしょう、改めて残暑お見舞い致します☆天候に合わせたのではないのですが発行が大幅に遅れてしまいがちのせしりは甘受しお詫び致します☆三年前から続けている児童福祉週間記念事業の、懇談の夕と講演会を、お忙しい飯田、桂田両先生をお招きして行い、その要旨を特集しました☆先生の意を細大洩らさずご紹介するよう努めました。力量、紙面の小ささを悔やみます☆児童福祉週間を終えてすぐ取り組んだ夏休みも後僅か、大きな跳躍の二期へと備えて向かいます☆「なだしお」などの軍関係の事件が続く組織と個人の関係の問題をつきつきました☆人を育て活かすための組織が、組織のために見殺しにする愚を犯さないよう「子どものための子どもの施設」を願った初心に返って点検し、更に励みます☆天高く実りの季。収穫の豊かならんことを・・・(哲)